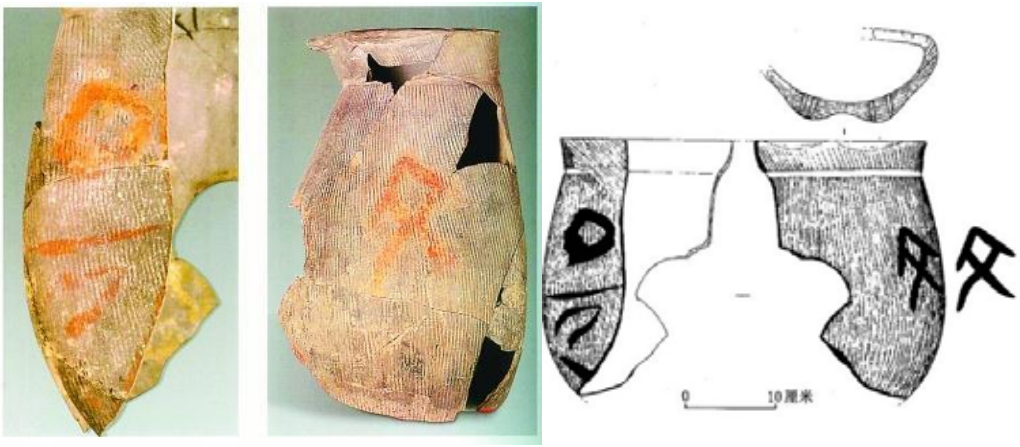
考古学から見る龍の源流　２　－黄河流域の考古発見を中心に

龍谷大学　徐光輝

河南省濮陽県西水坡遺跡第１組貝殻龍虎（西水坡文化Ⅱ期＝後崗Ⅰ期文化、6500－6300 年前）
黄河（下）流域では最古の龍虎。濮陽県は河南省北部、河北省南部の濮水流域に立地する。
被葬者の身長は 179 ㎝、３人の子供が副葬、墓主の足元にはもう１人の足骨が置かれている。

山西省襄汾県陶寺城郭遺跡の貴族墓と龍文盤
黄河中流域では最古の盤龍図、城郭面積は 280 万平方メートル



山西省陶寺遺跡の陶文「文、邑？」（毛筆で書かれた最古の漢字らしき記号）

一、「龍・竜」に関する古人の解釈

●『説文解字』によれば、「龍、鱗虫之長。能幽能明、能細能巨、能短能長。春分而登天、秋分而潜淵。」とある。

●『礼記・礼運』によれば、「麟、鳳、亀、龍、謂之四霊。」とある。

●『孔子家語・執辔』によれば、「甲虫三百有六十、而龍為之長。」とある。

●『易・乾』によれば、「飛龍在天。」とある。

二、竜に関する現代学者の認識

ここでは、長い間中国歴史文化を研究している、京都大学名誉教授の小南一郎先生の解釈を見てみたい。

まず注目されるのは、小南一郎先生は、「竜」字を用い、「龍」字は使っていない。

中国では、鱗介類（鱗や甲羅を持った生物）の長（かしら）だとされる。

竜は、平素は水中にひそみ、水と密接な関係をもち、降雨をもたらすとされる。

しかし竜のより重要な性格は、時がいたれば水を離れて天に昇ることができるという点にあり、この地上と超越的な世界を結ぶことに竜の霊性の最大のものがある。

仙人となった黄帝が竜に乗って昇天したり、死者が竜あるいは竜船に乗って崑崙山に至るとされるのも、竜のそうした霊性を基礎にした観念である。

天子の象徴として竜が用いられるのもその超越性によるものであり、竜の出現が新帝の即位をあらわす祥瑞とされ、また天子が儀礼に用いる衣服の文様、十二章（按：中国皇帝の衣装の刺繍ー「龍袍」に見られる文様を指すが、時代によって九章もある）の中でも竜が最も重要なものである。

また、竜の隠れるもの、変化きわまりないもの（たとえば、竜は大きくも小さくもなれる）という特質から、大きな才能をもちながら世に現れぬ人物の比喩にも用いられる。孔子が老子を〈竜の猶（ごと）し〉と言ったのがそれである。

こうした超越的な動物である竜の原像となったのが何であったかについては、さまざまな推測がなされている。

蛇との関係を指摘するのは水との結びつきにより、その鼻の形から豚、四足のある所から鰐（わに）と関係があるとされ、また天地を結ぶところから竜巻を原形としたとする説もある。

出土遺物からみれば、後世の竜とつながる文様や竜形の玉器はすでに新石器文化の中に出現しており、卜辞（甲骨文）にも竜の字が方国、部族名として見える。

甲骨文の竜の字に特徴的なのは、その頭上にアンテナのような飾りを戴くことで、これがのちには「尺木」と呼ばれる竜の角となるもので、竜は尺木があるので天に昇れるのだとされる。

『礼記 らいき』では，竜は鳳，麟，亀とともに四霊の一つとされ（鳳凰、麒麟）、漢代に成立した四神の観念の中では、東方に位置づけられて青竜と呼ばれる。

四神の観念の成立にともなって竜の図像も多数出現するようになるが、そこでの竜は立派なたてがみと足とを持ち、馬との類似性が大きい。竜は天帝の馬だとされ、逆に大きい馬が竜と呼ばれるのも、竜と馬との習合を示唆しよう。

仏教伝来にともない、仏法を守護する八部衆の一つとしての竜（竜王）が中国古来の竜と重なり合い、四海竜王の観念が中国に定着するのもそうした結果である。

仏典の中では竜王が人間的に活躍するが、中国の小説や戯曲の中に竜王や竜女の物語が展開するのもまた、そうした外来文化の影響によったものであろう。

現在の民話の中に竜王や竜女がしばしば出現するほか、旧暦 2 月の「春竜節」には冬のあいだ眠っていた竜を呼びおこす種々の行事があり，また端午節には竜船の競争が行われるなど、季節の行事の中に水と豊作をつかさどる竜の農業神的な性格をみることができる。

（平凡社『世界大百科事典』より）

三、西水坡遺跡と伝説上の黄帝、東周時代激戦地との関係

西水坡遺跡には、淡水の貝殻で作った龍虎図は 3 組ある。

一つ目は上記の写真にある男性の墓、二つ目は龍虎のみ、三つ目は龍虎鹿（麒麟？）鳥の組み合わせである。注目される問題は下記の三つである。

１、四神信仰との関係

西水坡遺跡では、未だ玄武や朱雀が見当たらない。しかし、龍は東に、虎は西に置かれているなど、既に「東青龍・西白虎」という認識はあったようである。確かに、西水坡遺跡の東と北には、今も大きな湖があり、遺跡自体も 1980 年代の後半までには陸上に立地し、その後に水利建設で水没地となった。そもそも集落の東北にある湖に「龍」が潜んでいると思ったのか？

もともと四神信仰は、素朴な天文知識と深く関連し、天象から由来する 4×7＝28 宿が源である。ここには、東・西両方を意味する龍・虎しかないため、直接四神信仰に関連させるのは、なお根拠不足である。しかし、四神信仰の始まりに関わる考古発見として考えるのは妥当であろう。

图九三　第二组蚌壳龙虎平面图

第２組貝殻龍虎

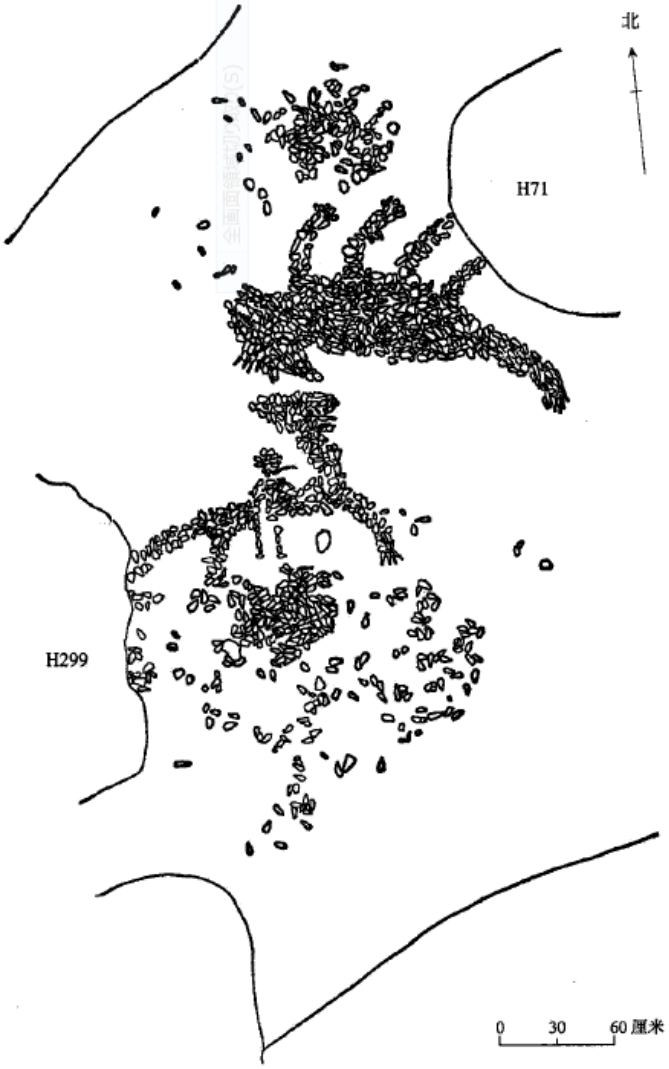
２、黄帝乗龍との関係

第３組龍虎図には、龍に乗っている人物のほか、虎・鹿（麒麟？）・鳥のような図案がある。

文献史料に見られる「乗龍」人とは、そもそも伝説上の黄帝が迎えに来た龍に乗って天に昇った、即ち亡くなったことを指す。

好太王碑によれば、高句麗初代王の朱蒙も、迎えに来た龍に乗って天に昇ったとある。

黄帝とは、中国古代伝説中の帝王。姓は公孫，名は軒轅であるといわれる。諸侯を攻める炎帝を阪泉(河北涿鹿（たくろく）県北西)にやぶり，反乱を起こした蚩尤（しゆう）を涿鹿で殺し，帝位につく。四方を平定し，天地自然の運行を調和させ，養蚕･衣服･舟運･牛馬車･文字･喪制･音律･医学など，すなわち人類文化を創造したと言われる。戦国時代の老荘学派の



图九四　第三组蚌壳龙虎平面图

第 3 組龍虎鹿（麒麟？）鳥

始祖ともされる。伝説中の帝王であることは言うまでもないが，戦国時代の斉国の青銅器銘文では，黄帝を高祖と呼んでいるから，東方地域の人びとの間には，黄帝を始祖とする伝承があったことは明らかである。

『史記』によれば、「黄帝采首山銅，鑄鼎於荊山下。鼎既成，有龍垂鬍鬚迎黄帝。黄帝上騎，群臣后宮上龍七十餘人……　余小臣不得上，乃悉持龍鬚，龍鬚拔，墮黄帝之弓。」また、「黄帝崩，葬橋山。」とある。

　橋山は現在の陝西省にあり、黄帝陵として祭られている。

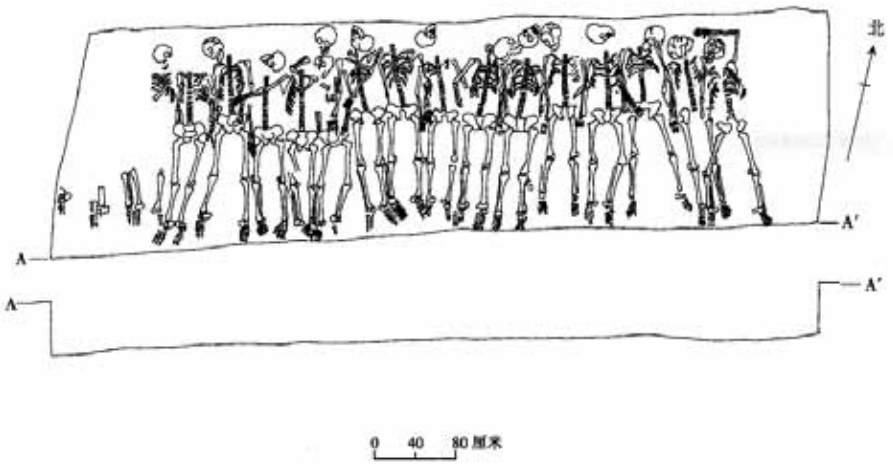
東京大学文学部蔵　好太王碑第 1 面碑文

碑文の冒頭部文：

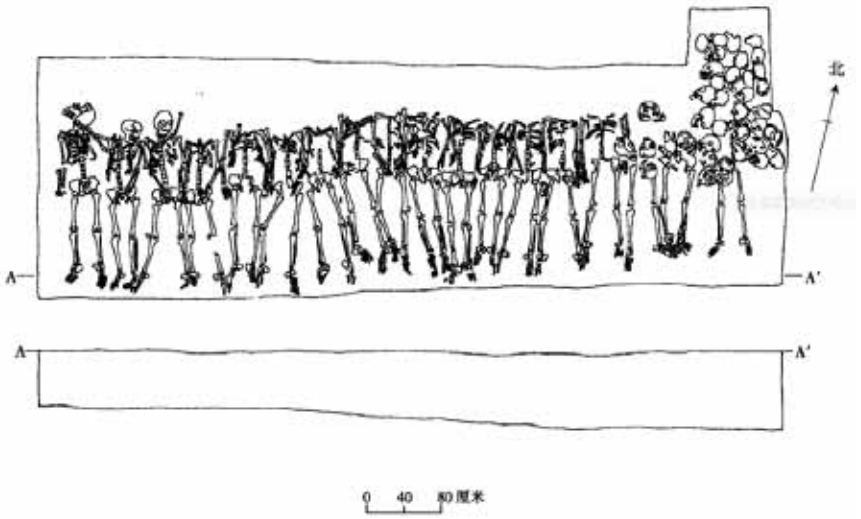
惟昔始祖，鄒牟王之創基也。出自北夫餘，天帝之子。母河伯女郎，剖卵降出生子。有聖□□□□□命駕巡車南下，路由夫餘奄利大水。王臨津言曰我是皇天之子，母河伯女郎，鄒牟王。為我連葭。浮龜應聲即為連葭。浮龜然後造渡於沸流谷，忽本西，城山上而建都焉。不樂世位，因遣黃龍來下迎王，王於忽本東岡，黃龍負昇天。顧命世子儒留王，以道興治，大朱留王紹承基業。[遝]至十七世孫國罡上廣開土境平安好太王，二九登祚，號為永樂太王，恩澤洽于皇天，威武柳被四海。掃除□□，庶寧其業。國富民殷，五穀豊熟，昊天不弔，卅有九晏駕棄國。以甲寅年九月廿九日乙酉遷就山陵，於是立碑銘記勳績，以永後世焉。……

（國罡上廣開土境平安好太王碑　高句麗長壽王 高巨連立）

３、東周時代激戦地との関係



图四〇八　PM170 平、剖面图



图四一九　PM187 平面图

西水坡遺跡の東周時代の「排葬墓」（すべて若者の男性、戦死者）

●城濮の戦い

春秋時代，晋を盟主とする連合軍が楚を中心とする連合軍を破った戦い。前 6 世紀後半，楚は中原に圧迫を加え，陳，蔡などを支配下におき，宋を攻撃した。そこで晋の文公は宋，秦，斉の連合軍を率い，文公 5（前 632）年に衛の城濮（河南省）で戦い，大勝して楚を撃退した。文公はこの戦いののち，践土（せんど）の会を開き，覇者となった。

践土の会とは、春秋時代，晋の文公が覇者となった会盟。文公は文公 5（前 632）年，城濮（じょうぼく）の戦いで楚に大勝したあと，践土（河南省広武県）に王宮を造り，周王を迎え，諸侯を集めて会盟した。斉，魯，宋，きょや，楚が敗北したため晋についた陳，衛，蔡や鄭も参加した。

城濮之戦の略図

●晋鄭鉄丘の戦い（中国語概説より）

公元 493 年 8 月，齐国送粮食给中行氏、范氏，郑国派军队护送，赵鞅得知这一消息后，要夺取这批粮食，以报被攻之仇。两军在卫国戚地铁丘（今濮阳县北二公里）相遇。由鲁逃晋的阳虎对赵鞅说：“我兵车少，应先列好队，遍插旌旗，彼见我状，必有惧心，战必胜之。”赵鞅采纳了他的建议。战前，赵鞅举行誓师大会，历数范氏、中行氏罪状及郑弃君助邪的不道行为。两军对阵，避难于晋的卫国太子蒯聩坐赵鞅的车右边。他们登上战车，远望郑军，见其人数众多，气势浩大，卫太子害怕，一时惊慌，从车上跌下来，御者将其扶起，骂他像女人一样懦弱无能。赵鞅怕兵士有怯战心理，以平民毕万七战获胜，家富百乘的事例鼓励大家。蒯聩也祈祷祖宗，保佑他们能打胜仗。

战斗开始，赵鞅冲锋在前，郑人射中赵鞅肩膀，鞅倒车内，旌旗亦被郑军夺去，伤亡甚重。这时蒯聩举戈冲杀，晋军争着立功，个个奋勇向前，打得郑军连连后撤。蒯聩率军急追，夺得齐军粮食千余车。郑军大败，死伤过半，铁丘一战尸骨堆积如山。战争中，范氏税官公孙龙（máng）被俘，赵鞅为利用他，将其放回。公孙龙为报不杀之恩，率私属五百人，夜袭郑军，夺回帅旗，交于赵鞅，以报主德。

四、「龍」字の源流と龍文化

下記は、もと立命館大学の白川静先生が監修した『漢字類編』に収録された、「龍」の甲骨文字、金文、篆書である。始終象形文字として今日までに発展してきたことが分かる。

一八九九年、安陽の小屯で初めて甲骨文字が発見され、今年でちょうど 120 周年を迎える。先月、安陽で盛大な国際シンポジウム兼記念大会が開催された。

これまで、世界各地に散在している甲骨文字を刻んだ亀甲（亀、牛、羊の骨から作られた刻字ト骨）は約 15 万片、文字数は約 4500、うち解読可能な文字数は約 2500 字（異体字を含む）、中国を中心に若手の研究者が輩出し、解読作業が大規模で行われており、今年は新しい『甲骨文常用字字典』が中華書局から出版された。

●現在の龍の祭り：

春龍節 - 旧暦 2 月 2 日 龍鱗餅や新年初の散髪で開運祈願

2 月 27 日は旧暦 2 月 2 日にあたり、いわゆる「二月二、龍擡頭（りゅうたいとう）」と呼ばれている。この伝統的な祝日は、「春龍節」とも呼ばれており、多くの風俗習慣が現在まで続いている。北京民間文芸家協会の劉一達副主席は、取材に対し、「春龍節は通常、二十四節気の一つ『啓蟄（けいちつ）』の前後に訪れる。

旧暦 2 月 2 日、民間の龍舞グループが南京城南老街で龍踊り

昔から、『啓蟄』とは『龍が動き出す』ことを意味しており、つまり、冬ごもりしていた龍が春の雷に驚いて目を覚まし、素晴らしい春の訪れが感じられる頃を指す」と話した。この祝日の風習は、ほぼ「龍」にまつわるものばかりで、例えば「龍鱗餅」や「龍須麺」を食べて開運を祈願する。中国新聞網が伝えた。

北京地方では、「春龍節」をめぐる様々な風習が残っている。劉副主席は、「開運を呼ぶために、この日には『龍』の字に関係する食べ物を食べる。例えば、水餃子を食べる際に『龍耳』を食べるといい、この日に食べる雲呑を『龍牙』と呼んでいる」と説明した。

北京の人々は、「二月二」には、餅（小麦粉を薄く延ばして焼いたもの）や麺も食べる。これらの料理も『龍』と関係が深い。餅を「龍鱗餅」と言い、麺を「龍須麺」と呼んでいる。

湖南省臨武県「二月二龍神祭り」、幸福平和を祈る双龍「龍擡頭」の踊り

民間には、「二月二は龍が頭を持ち上げる日で、子供も大人も散髪すると幸運に恵まれる」という言い伝えがある。「春龍節」の日に人々が子供の頭を散髪することで、子供の健やかな成長を願う。大人も同じく散髪することで幸運を呼び込むと言われている。

（人民網日本語版 2017 年 2 月 27 日より）

参考文献：

南海森主編『濮陽西水坡』（上下）、文物出版社、2012 年。